

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	INEI加盟大学と連携した授業研究・平和教育セミナー（1）： 「PELSTE2020」の成果報告
Author(s)	草原, 和博; 木下, 博義; 松宮, 奈賀子; 川合, 紀宗; 三好, 美織; 小山, 正孝; 影山, 和也; 棚橋, 健治; 川口, 広美; 金, 鍾成; 山元, 隆春; 間瀬, 茂夫; 永田, 良太; 岩田, 昌太郎; 井戸川, 豊; 丸山, 恭司; 吉田, 成章; 森田, 愛子; 桑山, 尚司; 佐藤, 万知
Citation	広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト報告書, 18 : 39 - 47
Issue Date	2020-03-19
DOI	
Self DOI	10.15027/48931
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048931
Right	
Relation	

INEI 加盟大学と連携した授業研究・平和教育セミナー（1）

－「PELSTE2020」の成果報告－

研究代表者	草原 和博（社会認識教育学講座）
研究分担者	木下 博義（教職開発講座）
	松宮奈賀子（初等カリキュラム開発講座）
	川合 紀宗（特別支援教育学講座）
	三好 美織（自然システム教育学講座）
	小山 正孝（数学教育学講座）
	影山 和也（数学教育学講座）
	棚橋 健治（社会認識教育学講座）
	川口 広美（社会認識教育学講座）
	金 鍾成（社会認識教育学講座）
	山元 隆春（国語文化教育学講座）
	間瀬 茂夫（国語文化教育学講座）
	永田 良太（日本語教育学講座）
	岩田昌太郎（健康スポーツ科学講座）
	井戸川 豊（造形芸術教育学講座）
	丸山 恭司（教育学講座）
	吉田 成章（教育学講座）
	森田 愛子（心理学講座）
	桑山 尚司（グローバル教育推進室）
	佐藤 万知（高等教育研究開発センター）
研究協力者	大坂 遊（教育ビジョン研究センター）
	守谷富士彦（教育ビジョン研究センター）
	濱本 想子（教育ビジョン研究センター）

I 研究の背景と目的

本研究グループは、広島大学インキュベーション研究拠点「教育ビジョン研究センター（EVRI）」の構成員として、国内外の研究者・異分野の研究者と連携し、研究拠点の確立と次世代の教育のデザイン・提案・構築に取り組んできた。

幸いなことに、2019年2月、構成員の大半が所属する広島大学大学院教育学研究科は、教員養成機能をもつ研究大学の国際的ネットワーク International Network of Educational Institute (INEI) への加盟が承認された。そこで本研究グループは、INEI との連携を実質化するために、国際共同研究のシーズ発掘や研究者のマッチングを主な目的とした連続セミナーを3ヵ年計画で開催することとした。

本研究科が、日本の加盟代表大学として、また広島に拠点を置く大学として IENI に貢献しようとするとき、他大学にはない広島大学ならではの「強み」を発揮することが期待される。精査の結果、その強みを、①被爆地としての広島が培ってきた「平和教育」、②日本の

教育文化を基盤に構築され、世界的に展開されてきた「授業研究」、③本研究科の博士課程が実質的に養成し、日本の高等教育界に輩出してきた「教師教育者」、これら3点に発信と交流の可能性を求め、初年度のセミナー“Peace Education and Lesson Study for Teacher Educator 2020”を企画した（以下、このセミナーのことを、文脈に応じて「PELSTE」「PELSTE2020」または「本プログラム」と使い分け、略記する）。

本稿では、本プログラムの計画と実施を概略するとともに、参加者らの日々の活動に対するリフレクションシート及びプレゼンテーションを基礎データに、本プログラムに対する評価を確認する。また、プログラムが提供した「平和教育」「授業研究」「教師教育（者）」の取組に対する参加者らの見方を整理し、PELSTEの改善の方向性を検討したい。

（濱本想子*・草原和博*）

II PELSTE2020の計画と実施

1. プログラムの目的と参加者の選考

EVRIは、PELSTE2020の目的を、大きく以下の3点に設定した。

第1に、広島県の「平和教育」「授業研究」「教師教育（者）」を紹介し、自国の制度または自己の研究対象との比較考察の対象にしてもらうこと。第2に、広島大学の研究者とPELSTEの参加者で「平和教育」「授業研究」「教師教育（者）」をテーマに意見交換し、研究者ないしは専門職としての知見を深めること。第3に、国際共同研究のシーズ発掘や研究上のマッチングをはかることである。

これらの目的を受けて、以下の手続きで参加者を選考した。2019年9月8日、PELSTE2020への参加を希望し、日本の「平和教育」「授業研究」「教師教育（者）」に関心をもつ大学教員または大学生・大学院生を推薦してほしい旨、INEI加盟大学に向けて公募を送付した。加盟大学には、応募者本人の略歴と管理職による推薦書の提出を求めた。

定員を4名として公募したところ、8名の応募者を得た。選考にあたっては、以下5つの観点を設定し、とくに観点5に重みづけを行った。

・観点1：研究業績・研究実績

応募者は、高い研究実績を有しているか、高い研究能力が示されているか。

・観点2：プログラムとのマッチング

応募者は、日本の平和教育や授業研究に関係の深い活動・経験を有するか。

・観点3：広島大学との協働の可能性

応募者は、広島大学の教員・院生と協働研究を展開できる可能性があるか。

・観点4：個人の関心・意欲

応募者は、日本の教育や広島大学との連携に高い関心・意欲を示しているか。

・観点5：広島大学にとってのメリット

応募者は、広島大学にとって魅力的か、中長期的な利益・効果が期待できるか。

本研究グループで慎重に審議した結果、表1に示すように最終的には定員を超える5名の参加者を決定し、10月17日に選考結果を通知した。とくに意図したわけではなかったが、若手の大学院生から採用されたばかりの准教授、そしてベテランの教授まで多様なキャリアをもつ研究者を選考することができた。また、参加者の加盟大学は北米・南米・ヨーロッパ・アジアと広域にわたり、地理的なバランスにも配慮することができた。

表1 PELSTE2020の参加者

参加者	所属	立場
A	University of Wisconsin, Madison (米国)	Assistant Professor, Department of Educational Policy Studies
B	Faculty of Education of the University of São Paulo (ブラジル)	Associate Professor, Head of Department of Teaching Methodology and Comparative Education (EDM)
C	The National Institute of Education, Singapore, NIE (シンガポール)	Associate Professor. Psychological Studies Academic Group
D	Ontario Institute for Studies in Education, University of Toronto (カナダ)	Graduate student at the Ontario Institute for Studies in Education
E	University College London, Institute of Education (イギリス)	Graduate student, MPhil/PhD in Education, Practice and Society

2. プログラムの内容

PELSTE2020の目的を達成するために、表2のようなスケジュールを組んだ。

プログラム初日の前半には、日本の学校制度や学校文化などに関する全般的な情報を提供するために、広島大学附属東雲小学校・中学校の訪問を設定した。ここでは、算数科と社会科の授業観察、子どもが主体となって行う給食の配膳や清掃作業の観察、カリキュラムと附属校としての研究体制及び教育実習についての聞き取りを行うようにした。

初日の後半以降には、広島の「平和教育」「授業研究」「教師教育(者)」を学ぶ企画を順次設定した。

「平和教育」に焦点化した企画としては、①広島平和記念資料館における展示の鑑賞・検討と被爆証言のヒアリング、②広島大学附属中学校・高等学校における「広島平和記念資料館の the Last 10 feet を再デザインしよう」の観察と参加、③広島市立基町高等学校における「原爆の絵を描く」の観察と聞き取りを、それぞれ設定した。

「授業研究」に焦点化した企画としては、④広島大学附属小学校における大学と連携した研究体制及び『学校教育』の出版に関する聞き取り、⑤広島県立広島叡智学園中学校・高等学校での「よりよい広島教科書をつくろう」の授業観察と研究協議の参観を、それぞれ設定した。

「教師教育(者)」に焦点化した企画としては、⑥広島県立教育センターにおける現職教員の研修システムに関する意見交換、指導主事や研修生との対話、⑦広島大学における初等・中等教員養成・グローバル教員養成のカリキュラムに関する意見交換、大学に勤める教師教育者を育てる「教職課程担当教員養成プログラム(教職P)」に関する情報提供を、それぞれ設定した。

このようにプログラムには、広島の「平和教育」「授業研究」「教師教育(者)」にそれぞれ紐づけた独立した企画を立案しつつも、一部の企画は複数のテーマを組み合わせ、相互の関係性を示すように実施された。例えば、広島県立広島叡智学園中学校・高等学校での「よ

りよい広島教科書をつくろう」は、日米の平和言説を子どもが教科書づくりを通して再構築する新しい「平和教育」の構想を議論する場であるとともに、授業者が事後に実践を振り返りかえる様子を観察したり、PELSTEの参加者自身も研究協議を行い、その結果を授業者にフィードバックしたりする「授業研究」を直接経験する場でもあった。さらに、「りよい広島教科書をつくろう」の授業を、大学教員・大学院生・学校教員が協働で教える様子を観察してもらうことで、広島大学の新しい「教師教育」の戦略と、理論と実践を結びつける「教師教育者」の役割を紹介する場でもあった。

広島大学の「教師教育」カリキュラムを紹介する際には、「授業研究」を教員養成の場でのどのように教えているかも併せて扱うようにした。教職課程担当教員養成プログラムの紹介の場でも、「授業研究」が「教師教育者」の専門職性を高める主たる方法論になっていることを強調してもらった。

このように広島の「平和教育」「授業研究」「教師教育（者）」を個別かつ有機的に検討できるようにプログラムを計画したところに、PELSTE2020の特質がある。

表2 PELSTE2020のプログラム

日時	内容	場所
2020年 1月9日	PELSTE オリエンテーション	教育学研究科 B101
	学校紹介、校内研修・研究体制の聞き取り 授業参観（社会科・数学科）、給食・掃除の見学等	広島大学附属 東雲小学校・中学校
	現職教員の研修システムの聞き取り 長期研修生との意見交換等	広島県立教育センター
	教育学研究科長表敬	教育学研究科長室
1月10日	広島平和記念資料館の見学	広島平和記念資料館
	被爆体験証言のヒアリング	
1月11日	「日米の子どもが協働でヒロシマの教科書をつくろう」 の観察研究、研究協議の観察	広島県立広島叡智学園 中学校・高等学校
1月12日	日本のレッスンスタディ 広島大学の初等・中等教員養成、グローバル教員養成 広島大学の教師教育者養成	教育学研究科 B101
1月13日	自己研修日	
1月14日	「広島平和記念資料館の the Last 10 feet を再デザインしよう」 の授業観察、学習への参加	広島大学附属高等学校
	授業研究の聞き取り	広島大学附属小学校
	「原爆の絵」の作品解説 作品制作のようすの観察、生徒との対話	広島市立基町高等学校
1月15日	教員養成科目の授業見学、教員との対話 (比較科学教育論、工芸表現論、社会認識教育学概論)	教育学研究科 B101
	PELSTE 成果報告会 ①PELSTE で学んだこと、②広島大学との連携可能性	

(草原和博*・濱本想子*)

Ⅲ リフレクションシートの考察

本プログラムの参加者には、リフレクションシートの作成を依頼した。

リフレクションシートでは、主な活動日（13日と15日を除く5日間）の満足度を5段階評価（5…非常に満足，4…やや満足，3…どちらでもない，2…やや不満，1…非常に不満）で尋ねた。また、自由記述で「本日のプログラムを通して理解できたことと理解できなかったこと」と「本日のプログラムを通して得られた示唆」について回答を求めた。

1. 満足度

まず、5段階評価の結果について検討する。全員の5日間の平均点は、5点満点で4.7点だった。参加者の評価は、おおむね高水準だった。以下、リフレクションシートの記述から、高評価のポイントを抽出する。

表3 プログラムに対する満足度

参加者	9日	10日	11日	12日	14日	合計
A	5	5	5	4	5	24
B	5	5	4	5	5	24
C	5	5	5	5	5	25
D	5	5	4	3	5	22
E	5	4	5	4	4	22
合計	25	24	23	21	24	117
平均	5	4.8	4.6	4.2	4.8	4.7

(1) 評価されていた活動

5名の参加者が、共通してポジティブに評価していたのは、以下の点である。

・附属学校（広島大学附属東雲小学校・中学校，広島大学附属小学校）での学校教育や校内研修に関する解説： 校長・副校長から学校のカリキュラムとその具体，実施されている校内研修について直接説明を受け，質疑応答の機会が得られたことは，貴重な経験として認知されていた。

・広島県立教育センターでの教員研修システムに関する解説と意見交換： 広島県で実施されている現職教員研修のシステムや課題について，指導主事や研修生との対話を通して深く知ることができた点は，意義ある経験として認知されていた。

・広島平和記念資料館の見学と被爆体験講話の聴講： 原爆の被害や歴史について，実際に見たり聞いたりしたことは，有意義と理解されていた。とくに被爆体験者との直接対話の機会は，貴重な経験として受けとめられていた。

・広島市立基町高等学校の「原爆の絵」に関する活動の参観： 原爆の経験談を絵にする生徒らの表現レベルの高さに感銘を受け，原爆の歴史を伝承する新たな取組の意義を学ぶことができたことと表現されていた。

・広島県立広島観智学園中学校・高等学校と広島大学附属小学校・高等学校での授業観察： 両校の授業実践が，平和をテーマに批判的な思考力を育成していること，大学と学校が協働

で取り組んでいることが印象深いとされた。また、これらの授業で、子どものアクティブな思考や活動を促す指導技術が駆使されていた点も共通に評価されていた。

・**授業研究に関する解説とその観察：** 日本の授業研究の歴史や構造、運営のし方について理解できたことに価値を見出していた。

総じて参加者は、各企画の話題提供者や教員・支援学生らに質問したり、対話したりする機会が多かったことに満足を示していた。さらに、いかなる質問にも、謙虚に、肯定的に、そしてオープンに受け答えしてもらえたことも有意義であり、授業研究の発展を支える日本人の特徴を理解できたとの記述もあった（参加者 D、以下、括弧内のアルファベットは、表 3 の参加者名と対応する）。

（2）疑問や驚き

本プログラムの満足度は高かったため、ネガティブなフィードバックは少ない。しかし、以下のような疑問や驚きが寄せられた。

・**平和教育のねらい：** すべての参加者より、日本の平和教育が「原爆」の教育に偏っており、画一的と指摘された。

・**平和に関する定義：** すべての参加者より、教員や生徒が平和の定義を明確に述べることができないことに疑問が呈された。

・**学校の施設・教具：** 附属学校を中心に授業観察（平和教育実践も含めて）を行ったが、ICT を活用していない授業が多く、日本に抱いていたイメージとのギャップで衝撃を受けたとの指摘が多数あった。

上記の活動以外では、12 日に広島大学内で開催された 4 つの連続セミナーは時間配分がタイトであり、アクティビティ性を欠いたとの指摘があった（D）。また、授業研究における計画段階の協議をみる機会が欲しかったとの要望があった（A、D）。

2. 理解

次に、参加者が共通によく理解できた／できなかったと指摘したことを抽出する。

（1）よく理解できたこと

・**広島歴史・被害：** 平和記念公園や広島平和記念資料館の見学、被爆証言者の講話、学校での平和教育の観察などの見る・聞く活動を通して、これまで知る機会のなかった広島の歴史や原爆の被害を理解することができた。

・**広島の平和教育：** 広島の平和教育が原爆の歴史と被害を強調する一方で、社会的・政治的な分析が総じて欠落していることが理解できた。

・**日本の授業研究：** セミナーや授業研究の観察を通して、日本の授業研究が教師の自発性や協調性の高さ、また謙虚さなどの性格に支えられて組織的に行われてきた専門性開発のアプローチであることが理解できた。

・**現職教員研修システム：** 広島県立教育センターでの活動を通して、日本の現職教員研修の仕組みや機会の多さ、さらには授業研究を含む現職教員研修を進める上での労働環境の課題について理解を深めることができた。

・**広島大学の教員養成システム：** 広島大学でのセミナーや附属学校での聞き取りを通して、授業研究の方法論を取り入れた教員養成や教師教育者養成の方法について理解できた。さらには大学教員や附属校教員との質疑応答を通して、附属校で完結する教育実習のシス

テムと課題を把握できた。

・**広島大学の教育と教師教育**： 広島大学が、附属学校や公立学校、教育センターなど多様な組織と協働しながら教員養成と現職教育に取り組んでいることの認識が得られた。

(2) よく理解できなかつたこと

・**日本の教育制度や教育政策**： 日本の教育制度と政策、国際機関との連携に関する情報が少なかつた (B)。加えて、日本の教育で育成すべき能力や教育課題とその対応策についても理解が深まらなかつた (B, C)。

・**現職教員の専門性**： 現職教員の専門性開発のための目標やスタンダードが不明瞭と指摘された。それらを策定し、教員間で共有することが、現職教員研修の発展には欠かせないと提案もあつた (C)。

・**授業研究の効果**： 教員の自発的で協働的な専門性開発の方法として、授業研究が世界に普及する可能性は理解できたが、授業研究本来の草の根的な要素を損なうことなくそれを実現できるかは、疑問が残る (A~E)。また、多くの時間が費やされている教員研修や授業研究が、子どもの学習改善にどの程度 (本当に) 活かされているかを評価する方法や成果が分からないと指摘された。教員のワークバランスや教員研修や授業研究に充てる時間の制度的な保証 (労働時間の中にいかに収めるか) も理解できなかつた (B, D)。

・**複式学級の研究と教育**： 広島大学附属東雲小学校で複式学級の仕組みや背景について説明を受けて、附属校で新しい取組を実験的に行い、成果を発信していく意義を確認できた。一方で、複式学級に関する実践・研究がなぜもっと積極的に発表されないのか、複式学級に関する理論や指導法がなぜ大学で (教育実習の前に) もっと教育されないのか、その理由が分からなかつた (D, E)。

3. 示唆

最後に、参加者が本プログラムに参加して共通に見出したとする示唆を抽出したい。

・**ヒロシマの歴史や被害を語り継ぐ方法**： 国家間の違いはもちろん、国内でも地域によって広島に関する教育内容の違いや理解の差があることが分かり、その課題を共有できた。その上で、「語り」や「絵」「展示」「教科書」など過去の事実を長く語り継ぐ方法について示唆を得た。

・**平和や平和構築の概念の共有・交流**： 本プログラムの多様な活動を通して、平和や平和教育、平和構築の概念に限らず、(それに関連して) 多様性や公平・公正、社会・技術・科学、アート等の様々な概念を再考することができた (A, C, D)。また、世界的な平和の実現に向けて、国や文化を超えて、これらの概念を共有し交流していく可能性について示唆を得た。

・**授業研究を通じた教師の専門性開発**： 授業研究の様子を観察し、実際に参加したことで、教師が大学等と連携してラーニング・コミュニティを創造したり、組織的に専門性を高めたりする方略について具体的な示唆を得た。とくにアジアと南米の参加者には、授業研究に可能性を見出す姿勢が認められた。

(濱本想子*・草原和博*)

IV プレゼンテーションの結果

本プログラムの最終日に「PELSTE2020 の成果報告会」を開催した。5名の発表題目は、表4の通りである。

いずれの参加者も、広島を取組を評価しつつ、以下のような課題を述べた。教師一人ひとりが、もっと平和概念を明確に語れるべきこと。様々な暴力や非正義に対抗していける平和構築志向の教育を推進すべきこと、授業研究を通して教師を授業変革や学校変革の主体（担い手）に育てるべきこと。また、教育プログラムを通じた学生交流や学会での共同発表、あるいは平和教育・授業研究の分野での共同研究の可能性が提案された。

表4 発表者と発表題目（発表順）

発表者	発表題目
D	Varying conceptualizations of Peace Education in Hiroshima
	広島平和教育の多様な概念化
A	Emphasis on Peace Education with a neglect on Peacebuilding
	平和構築を軽視した平和教育の強調
E	The Systematic Integration of Peacebuilding Across Curriculum
	平和構築（学習）のカリキュラムを横断した体系的統合
B	Deeper Understandings of Lesson Study: Grassroot Movements
	授業研究のより深い理解：草の根的運動
C	Professional Development through Lesson Study: the Possibility of Going Online, and hearing Teacher
	授業研究を通じた専門性開発：オンライン化や教師の声を聞くことの可能性

（濱本想子*・草原和博*）

V リフレクションシートとプレゼンテーションが示唆すること

本稿では、リフレクションシートとプレゼンテーションの内容から、プログラムの評価と広島の「平和教育」「授業研究」「教師教育（者）」に対する参加者の見方を整理してきた。これらの結果を踏まえ、PELSTEプログラムの改善の可能性を述べたい。

第1に、多様な「平和教育」実践を提供していく必要性である。今回は、原爆の経験の「継承」やヒロシマの語りの「再構築」に焦点を当てた取り組みに特化して、実践を紹介した。その結果、参加者からは、広島の平和教育は、構造的暴力や不正義の矯正といった普遍的な訴求力が弱く、世界の「平和教育」「平和構築」の潮流とは一線を画しているとの指摘が相次いだ。次回は、広島の平和教育の多様な試みを紹介するとともに、世界の「平和教育」「平和構築」の理論体系のなかに広島の実践を位置付け、その特色や意義を議論する場を設ける等の工夫が求められるだろう。

第2に、「授業研究」を多層的に俯瞰する機会を提供する必要性である。今回は、授業研究をリアルに観察する機会は、実質、広島県立広島叡智学園中学校・高等学校における授業

の事後検討会のみだった。それ以外は理論と実践の情報提供にとどまっていた。参加者の声にあったように、次回は、準備段階と事後省察段階、それぞれの授業研究を参観できるように企画を検討したい。

また、日本の授業研究には、学校ベースの小規模な授業検討会から、民間ベースのサークル活動、ブロック単位の研究大会、官製研修の一環で行われる授業研究や大学の研究ベースで行われる授業研究まで、目的や機能を異にする多様な授業研究が存在する。しかし、今回のプログラムでは、残念ながらその断片しか示すことができなかった。結果的に、日本的な文脈で「こそ」、文脈で「のみ」授業研究が成立すると受け止めたコメントが少なくなかった。そこで次回は、様々な授業研究のカタチを示し、それが各国の教育・研究の改善に与える示唆を検討するなどしたい。

第3に、参加者の疑問や問題意識に応えるリフレクションや、プログラムの目的や訪問先の訪問意図等を伝えるブリーフィングを充実させる必要性である。全体的に過密な日程となり、個別企画の事前事後に対話の時間を確保することが難しかった。結果的に、リフレクションシートには、疑問やさらに理解を深めたいことが多数散見されたし、その中には運営側の補足説明で解消できる疑問も少なくなかった。

また、広島大学で実施した講義中心の集中セミナーに対しては、アクティブさを欠いたとの指摘を受けた。そこで、集中セミナーの形式は取りやめ、参加者の疑問に答えたり、リフレクションを支援したりする対話型セミナーに切り替えるのも、一案だろう。最終日の成果報告会も論点の拡散傾向は否めなかった。そこで、参加者が協働で成果をまとめたり、広島教育に対して提案書を作成したりするワークショップを企画することも考えられるのではないか。

PELSTEはEVRIとして初めての試みとなったが、上述のような前向きな示唆の得られるPELSTE2020となった。長期的には、過去のPELSTE参加者が、数年に一度広島の地に再結集して、「平和教育」「授業研究」「教師教育（者）」に関する国際会議を開催すること、そして会議の成果を出版して、広島大学の教育・研究上の強みをさらに強化・発信していくことを構想したい。

なお、共同研究に向けた研究者間のマッチングでは、広島大学側の研究者情報が圧倒的に不足しているとの指摘を受けた。本研究科の所属教員の専門分野やCVが記載された資料、またはURLを事前に提供するなどして、当初の目的を達成できるように努めたい。

PELSTEの実施に当たっては、EVRIのスタッフと教育学研究科に多大なご支援をいただいた。ここに記して感謝します。

(草原和博*・木下博義・松宮奈賀子・川合紀宗・三好美織・小山正孝・影山和也・棚橋健治・川口広美・金 鍾成・山元隆春・間瀬茂夫・永田良太・岩田昌太郎・井戸川豊・丸山恭司・吉田成章・森田愛子・桑山尚司・佐藤万知・濱本想子・大坂 遊・守谷富士彦)